うれしーの、じゃないよ。

ピンポーン。ピンポンピンポーン。
酷暑の八月。サマータイムとはいえ、朝六時にチャイム鳴らすって誰？ナニゴト？
おそるおそるインターホンをのぞくと、ハンディファンを顎の下でフリフリしている姉が笑っていた。
「おはよー」
「おはよーじゃないよ、何それ？仕事は？日本戻ったの？」
姉はまあまあ、と手をひらひらさせながら、えらく重そうなスーツケースを玄関に引き上げた。タイに転勤して五年以上、一度も帰らなかった姉が、背中を向けたまま言う。

「ありがとね、いろいろ。大変だったよね」

大変、なんて漢字二文字じゃ足りない。
施設に入っていた母が、明け方急に亡くなった。産まれた時から母しかいない家に育った僕は、身内の死が初めてで、深夜三時に突然電話で叩き起こされ、
「明日医師が死亡診断をしますから、十一時頃こちらにいらしていただけますか」
と言われても、ちょっとよくわからなくて、スマホを握ったままトイレに駆け込んで、しばらく便座に座って、ヤフーニュースをスクロールしたりなんかして。
「よく一人で動いたね。急いで決めること、多かったでしょ？」
急いで、なんてもんじゃない。大至急だった。

翌朝、施設に行くと担当の小竹さんが入口で待っていて、水色の封筒を渡された。表には、見慣れた母の丸っこい文字で“晴へ”と、その下に指示三つ。
① 深呼吸
② お茶を一口飲む（二階の踊り場に自販機がある。PASMO で買える）
③ 窓際のソファでこの手紙を読む
母に教えられた場所に、自販機はちゃんとあった。ガチャンという大きな落下音がしっかりしろ、と背中を叩いてくる。冷たい日本茶を一口飲んでから、震えそうになる手で封を開くと、中には、その後数時間で僕がやらねばならないことが、全部書いてあった。僕が迷わず、速やかに動けるように、母は AI チャッピーとのやりとりを印刷した A4 用紙を、三枚も折りたたんで残していた。

『お通夜も告別式も要らない、焼いてくれればいいんだけど』
『市の葬祭事業を使う方がいいの？理由も教えて』

『見積り時に隠れがちな追加費用を教えてくれる？』
費用、手続き、僕がつまずきそうな点を、全部先回りして何度も質問している跡。
『息子には、ドライアイスの追加料金、安置料、車の移動距離課金、その辺気を付けてって言うね』

魚じゃないんだから、自分のこと焼いてくれりゃいいって、なんなんだよ……。

「すぐにでも葬儀社を決めて、今日中にご遺体を移してもらわないと困ります」と事務的に告げられ、一瞬フリーズしそうになったけど、手の中の母とチャッピーが、僕を支えてくれた。この通りやればいい。この番号に電話して、聞き方はこう、支払いはこう。

「人が亡くなってから葬儀社を決めるまで、平均で約三時間以内って聞いたことあるわ。にしても、どこまでもお母さんらしいね。ねえ、お茶の缶どこ？」
「戸棚の右下。いちばん下の段」
缶を手にとり、姉は、丸く縮こまった茶葉を急須に落とした。少し冷ました湯を注ぐ。その落ち着いた淹れ方を見ていたら、やっと、今ここに戻ってきた気がした。
「お母さん、嬉野茶好きだよね」
そう。いつもそれ。「この漢字が好きなのよね」と母は笑った。
「あたしもそれ聞いたことある。嬉野って文字が『うれしーの』に見えて、ニッコリしちゃうんでしょ？」

言霊だけじゃなく、母は「筆霊（ふでだま）」も信じていた。文字を書くこと、見ることの力。だから姉は「優」でユウ、僕が「晴」でハル。人生で一番多く目にして、一番多く書く名前は、見るたび微笑んじゃう一文字がいい、と笑った母。

姉が湯気の向こうから言う。
「実はさ、お母さんから手紙もらったの、ちょっと前に。自分が死んだら、すぐには帰ってこなくていいから、焼かれた翌日の朝一番に、晴に美味しいお茶をいれてあげてって」
最初の数日は悲しいなんて思う暇ないけど、本当に形がなくなった翌朝は、きっと途方に暮れると思うから、って。

だからさ、魚じゃないんだから、焼かれたとか言うなよ……。

湯呑から熱いお茶をすする。ほんとに母さんは、どこまでも先回りして。姉も姉だ、頼まれたからって、遠いタイから指示通りのタイミングで戻ってくるなんて。五年帰らなかったのは、母さんにどんな治療でも安心して受けさせてあげるために、自分がしっかり働くって決

めたからに違いない。薄情なんかじゃない、実は誰より優しい姉、優。
なんだよ二人して。嬉野茶飲んで、うれしーのって言えってか。
いや、さすがに言えないでしょ……。
湯気が鼻の奥をツンとついた瞬間、視界がにじんだ。
あの深夜三時の電話から、高速ベルトコンベアに乗せられるように動き続けて、今、張りつめていた何かがほどけた。ポロポロ涙が落ちて、湯呑の中に柔らかな波紋が広がる。その揺れを見ていたら、あの能天気な『うれしーの』はもう二度と聞けないんだと気づいてしまって、僕は、母がいなくなってから初めて、声を出して泣いた。